

Moje West Chronicle

~京都ミュージックシーンの系譜~

<http://www.m21.or.jp/clubfame/mojoproject/>

phase 33 Lab.Tribe②

**巨大な怪物は爪痕を残し
暖まった流れが止まった**

バブルという怪物が、日本に残した爪痕は大きく、その見えぬ傷は長く日本を蝕んだ。経済の破綻に国が歯止めをかけられなかったケースも多く、「2ndウェーブ」、3rdウェーブ、まさに余波やね。それがウチにも来た。同店のプロデューサー金正氏は言う。昨月号で紹介したとおり、同店が突如その看板を降ろさざるを得なくなったのは、バブルがはじけたと言われているから、およそ10年もの年月が経った後だった。それは同店の経営が立ち行かなくなったのではなく、物件の管理会社が変わったという事情だった。むしろその頃の同店は、開店以来、順調に右肩上がりの成長を続け、まさにピークにあった。ピークという表現も適切かもしれない。それは相応の歴史があり、山や谷があつてこそ言えるのだから。消費が冷え込んだと言われた時代に、順調に登頂を目指した山の半ばで下山を強いられるようなものである。

「暖まった流れが止まってしまった」という述懐に、「次、どうする?」と考えたときのストレスは想像に難くない。淀んでしまったが暖かいうちに再度流そうと、運営陣は物件を探し歩いた。だが実績がある分、自分たちの理想の演出や人の流れを作れる立地、ハコがなかなか見つからなかった。淀みの温度も冷えかけ、心も折れかけたとき、救いの手は、残念ながら京都の西、大阪から差し伸べられた。

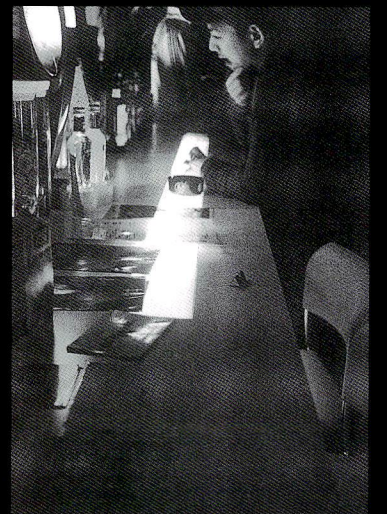
**再び現れたホワイトキューブ
だがそれは京都ではなかった**

「アメリカ村の」三角公園に音楽を中心にしたメディア基地をつくりたい。そんなオファーが舞い込んできた。それは再び現れた真っ白なキャンパス、「ホワイトキューブ」であった。「建物をいちらから建設する中でプロジェクトだったので、自由にコンセントやサウンド&ライティングの演出も提案できた(金正氏)」。それが「RANGLE」というハコである。三角公園に面したという意味もあるが、それぞれに性格の異なる3フロア構成で、吹き抜けを通して3つのアングルを見ることが出来る。つまり「トライ・アングル」。「Lab.Tribe」同じ、店名に複数の意味を持たせる、そのキミックが実は隠れている。これは年間10万人もの動員を計画する店で、それが可能なバックボーンをもっており、実際に近い数字を実現している。ただし、土地が大阪である。それまで培った京都のカルチャーや、手法が使えないストレスはなかったのだろうか。「新天

地としてはよくやった方やと思う。プロモーションに関してはFM802とのラインとか、立体的にできたというのものもあるし(金正氏)。ただ、オーナーである大原義盛氏は、同業種内でのフレイヤーの交換などを好まない、ワン&オンリーを求める一匹狼的なところがあった。「近所付き合ひ大切だから、これもプロモーション」と諷めるシーンもあったね(笑)。やっぱり街が大きくなければなるほどミスターになる。解りやすいものを求めるんやね(金正氏)。つまり、それが「マス」である。当時の音楽性で言えばヒップホップやトランス。イメージは80年代のカリフォルニアではなく、90年代以降のマンハッタン、プロンクスのギャングたちにスクラプリングという感じである。「京都で言うならピンポイントでリビーターを得るところやけど(金正氏)」。このコメントには驚いた。今号のP.58〜P.59で大沢伸一氏が言っていることと同じなのである。外を見ると、内側が解るものだ。

**都会の肉弾戦と、京都的な別物と
絶対に戻ろうと、心に誓った**

それだけに、大阪ではアンタらがやろうとしていることは京都的や」という評も頂戴した。それこそメトロが「Trio」「Friday」や「G.Love & Special Sauce」、日本のシーンで言えば「小西康陽」や「PZNCATO FIVE」をフッキングしたことに對して、大阪で主流となったヒップホップやトランスという肉弾戦は真逆の存在であった。「京都系」というのは、いわゆるポップ系、ハッピーチャームやフルダグンスミュージックというやつだからね。大阪は確かにその真逆ではあったけど、でもまあそれは『やりにくさ』、というよりも『違い』やね(金正氏)。時代は「ギャル&ホスト」、日本のミュージックシーンで最も目にしたレベルは今に続く「aveX」となるのか。それでもイギリ



スのパンクシーンから派生したハイ・ピートのドラムベースというジャンルを海外からダイレクトに持ってくるなど、レジスタンス的にレヴオリュションナルなものを模索してはいた。ともあれ、大阪でも予定とおり軌道に乗せ、代表の大原氏は同様の施設を複数軒経営する立場となった。その中には東京は渋谷・道玄坂の「Club asia」「VENUS」も含まれる。錚々たるビッグネームのクラブフッサーができるようなハコである。先頃、「自信作やから、観てもらいたいと思つて」と笑いながら弊社を訪れてくれた大原氏が手にしていたのは、「Club asia」の周年を記念したDVDであった。「川村かおり」「VEBRA」「ZENE」「真木蔵人」らがそれぞれに祝いのコメントを述べ、中でも「Def Tech」は二が自分たちの出会いの場であるとコメントしている。

京都を離れて順調に推移し、ノウハウが増えていく一方、京都は河原町二条のかつての「Lab.Tribe」は、当てつけのようにモデルルームになっていたりもした。今や実在はしないが、それでも手掛ける全てのハコの原点は河原町二条にあった。「圧倒的な実力をつけて、いつかは戻ろう」。そう誓ってみたい。

**誓いは唐突に果たされる
復活とリベンジの日は訪れた**

そして、その機会がとうとう訪れた。しかも、全ての始まりである河原町二条の、かつてと同じ場所。ホワイトキューブの見栄えは変わったし、今やことは別に、比較にならないほどの大きなハコを構えてもいる。だが5年前は見えない点であったものが、今は線や面として解る。従来のコンセントはそのままだ、ハッキリと打ち出せるプランがある。そのためのノウハウも十二分に有る。大原氏にも金正氏にも「アナザーディメンション」という新たなコンセントがハッキリと見えており、

政治で
わたしは
変われない。

「例えばワールドワイドにやっているミュージシャンで、京都が好きなの、座って聴かせるコンサートホールやライブハウスでプレイするのは別の側面、それをやったらどうなるの？」と。彼らがオフタイムで、別名義でやりたいことを可能にする場所やね(金正氏)。「これも、メトロに近い文化なのだが、そこにもやはり「実験的」という要素が必要だ。

英国のブレア首相が「このギタリストは誰だ？」と問うたという「Simply Red」のギタリスト、「Kenji Jammer」が良い例だ。彼はこう言った。「ジョン・ライドンは「ロックは死んだ」と言った。それが真実だとしたら、ロックというフォーマットを使ってナルアウト・ミュージックをやったらどうなるか？」と。彼が「ゆるゆるギターズ」という名義で同店で行ったのは、その試みであった。ロックという大音量の音楽を、最小音でプレイする。まさにこれは実験であり、同店がその実験室となつたのだ。

**メジャーの正面には無いシーン
そこにカルチャーを見出したい**

「TAHTI 80X FPM」もそうやね。いわゆるアフター・パーティーみたいなもの。収益性も大事だけれど、それができれば、それ以上の感動が創れば良いと思う(金正氏)。形が決まっているものの側面、もちろんそれは下世話な出歯黒根性ではなく、側面を見せたいと思うプレイヤーに、「あなたかやりたいことですよ」という環境を提供したいということだ。「パッケージツアーの一箇所になりたいとは思わないからね。ハッと驚く、サーカスっぽいというか、ハプニングも大歓迎。予定調和を壊すことで、新しいメジャー概念を生み出すというかね(金正氏)。

今後、実現できたら素晴らしいと思うミュージシャンの名を聞くと、「マドンナ」という名前が出てきた。「基本はダンスミュージックやけど、ヴォーキングにしろ、ラップにしろ、ジャック・ジョンソンのようなオーガニックサウンドにしろ、その時々ポストメインストリームを常にいち早く提示して、エンターテインメントとしてショーアップしている、実はストイックな姿に強いシンパシーを感じる。それが実現できるかどうかは解らないが、件の「FRANGLI」では、プリンスやマキシ・プリーストのアフター・パーティーを実際に行っているのだから、あなたが夢物語でもあるまい。

クラブサートキットも、今はハッキリ見えている「面」である。ニュートラルな立場で、その面を生む発火点になりたいという。そういつた大がかりなイベントに際しても、ブックキングする相手には事欠かない。こと京都においては、ノウハウはブックキングだけではない。例えば大きなイベントがあるときは、近所に菓子折持って挨拶に行くし、近所のおばあちゃんが起き出す頃に、こっちは店のまわりをホウキ持って掃除してるわけ。茶ハツのスタッフが朝早くから角掃きしてたら、「おつ」と思つてしょ(笑)。僕は河原町二条界隈の住民でもあるから、どこのお家は慎重に行かなアカンというのも解るしね(笑)(大原氏)。「それは地域教育という概念であろう。」「神社で縁日があるとするでしょ。で、翌日に「ミナたらけ」になつていても、誰も「神社が悪い」とは言わない。ところが僕らは違うんです。」

**ムダこそ文化」という真実を
これからも京都に突きつけよう**

敢えて言ってしまうは、音楽はライブスタイルのごく一部、それをふまえて、良いハコと、良い音と、美味しい酒とフレンド

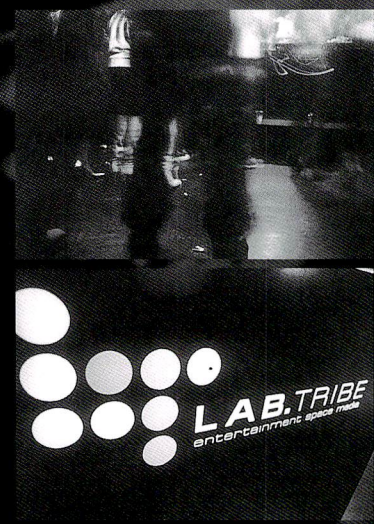
リーなスタッフがいることで、その一夜が人生の一部として記憶に残ればいい。「音楽が全て」ではなく、である。そういう、客観性という意味でクールに構えている。その良し悪しはやはり解らない。ライブハウスという場所が、基本的に音楽だけで、音楽が止められない者たちが集まる場所だとしたら、同店は異端で、ミュージックシーンとは少し距離を置いた立ち位置にいるのかも解れない。

それでも「ムダこそ文化。それを続けること」という指針を貫くことで、京都のフラッグシップを目指すのである。「何をハカなことか」。70年代のウェストロードの時代から、京都に現れた数多くのミュージシャンも恐らく同じ事を言われたらう。識者からすれば、それはムダに思えたからに他なるまい。それでも京都という街は彼らを輩出し続け、文化として根付かせてきた。同店が考える流儀なり役割が、それを成さないと切り切れようか。

いつの日か、この決して大きくはないハコにマドンナが訪れたとき、我々はその「偉大なムダ」の素晴らしさを目の当たりにするのかもしれない。

Lab.Tribe

京都市中京区河原町通二条南西角B1F
(デイリーヤマザキストアB1F)
075・254・1228
営業時間はライブにより不定。要問い合わせ
<http://www.lab.tribe.net>



'06 3.1 ブッシュ・アメリカ合衆国大統領が、厳しい警備体制が敷かれる中、'01年の同時多発テロ以降初めてアフガニスタンを電撃訪問。カルザイ大統領と会談。
'06 3.5 第78回米アカデミー賞で、大方の予想を覆し、現代アメリカが抱える人種差別問題を扱った「クラッシュ」が最優秀作品賞を受賞、オスカーを手に。